

高等学校公民科におけるアクティブ・ラーニングと「資質・能力」型学習観の形成 —「学び直し」の学校での主体的・対話的で深い学びを求めて—

杉浦 光紀（東京都立井草高等学校）

1. はじめに

（１）「学び直し」の学校とアクティブ・ラーニング

先生の話の聞いているのが苦手で、横を向いて私語をしたくなる。今、何をするのかを把握するのが苦手で、居眠りをしてしまう。ノートやプリントに板書を写すだけで時間かかり、やる気をなくしてしまう。覚えるのが苦手で、ペーパーテストは本当に点数が取れない。このような生徒の「学び直し」を理念とする高校¹で、どうすれば生徒を授業に参加させ、良さを引き出し、何かを学ばせることができるだろうか。その答えが、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業であった。溝上（2014）はアクティブ・ラーニングを「一方的な知識伝達型の講義を聞くという（受動的）学習を乗り越えるという意味でのあらゆる能動的な学習」で「書く・話す・発表するなどの活動への関与とそこで生じる認知プロセスの外化を伴う」活動としている²。学んだことや自分の考えを話し合い、発表する学習は、アクティブ・ラーニング推進校の指定を受け、社会で生き抜くことのできる生徒の育成を目指す当時の勤務校の方針であり、生徒自身もとめている授業にも重なっていた。

（２）「学習観」への着目と研究の目的

選挙権年齢が20歳以上から18歳以上に引き下げられ、高校3年生も日本の将来を選択することになった。こうした社会の変化に対応できるように、「他者とともに判断する」ことを学習活動の中心にしたアクティブ・ラーニングを継続的に行い、生徒に「授業で『深く考え、判断する』ためには何が必要だと思いますか」とアンケートした。その回答には、「人の話を聞き、自分なりにまとめる」「自分の考えを明確にして自分が理解していること（わからないまま人に任せるはなし）。その上で人の考えを聞いてさらに理解を深めること」とあった。生徒は深く考え、判断するためにどうすべきかを授業から学んでおり、社会科や公民科における市民的資質の育成にもなっている。「学び直し」とは、単に基礎・基本の知識を教えて学ぶというだけの行為ではないのではないか。授業における学習活動を通じて、自己の意見をもち、他者と考え合うという将来を見据えた学びについての認識（学習観）を育成することが必要であると生徒の記述に考えさせられた。

さらに、新しい学習指導要領でも「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進し、社会で求められる資質・能力の育成が強調されている³。「学び直し」の高校におけるアクティブ・ラーニングの実践が「学習とは何をするのか」について、どのような生徒の考えを形成するのかを確認することは、これからの時代の授業や学びを創る上でも意義があると考えられる。

そこで、本研究は、高等学校公民科「現代社会」の授業において、主体的・対話的で深い学びを実現するための授業（アクティブ・ラーニング）を実践し、その学習により形成された生徒の「学習観」、及び「学習観」の形成要因を検討するものである。1回や1単元での検証ではなく、1年間の授業を通じた学習観の変容に着目することで、学習観を形成

する要因を長期的な視座で検討することができると思う。

2. 先行研究

(1) 学習観について

学習観については、認知心理学や教育心理学における研究が数多くある。堀野・市川・那須(1990)は学習観を『学習とはどのようなものか』に対する学習者自身の認識とし、「失敗に対する柔軟的態度」と「思考過程の重視」という要因を想定した基本的な学習観の尺度を作成している⁴。市川(1995)は、堀野ら(1990)の学習観に「方略志向」「意味理解志向」を加え尺度を作成している⁵。さらに、高山(2000)は、大学生の学習観について、自由記述の分析から学習観の尺度構成を行い、詰め込み的な学習観(「強制・義務」「記憶」)、実用的な学習観(「知識の増大」「応用」「体得・反復」)、自律的・充實的な学習観(「生涯学習」「成長・向上」「主体的探求」)偶発的な学習観(「自然な習得」)を見出している⁶。また、植木(2002)は「学習観」を「学習とはどのようにして起こるのか、どうしたら学習は効果的に進むのか」という学習成立に関する「信念」に限定し、その内容を高校生の自由記述から探索することで学習観を捉えようとしている⁷。そこでは、「方略志向」「学習量志向」に加え、勉強ができるようになるような環境に接するという「環境志向」を見出している。植坂・瀬尾・市川(2006)は、「失敗活用」「思考過程重視」「意味理解」「方略」志向を認知主義的学習観、「結果重視」「丸暗記」「環境設定」「物量」志向を非認知主義的学習観と整理し、成績との相関を調べている⁸。小中学生の学習観について、鈴木(2013)は「意味理解志向」「暗記再生志向」「学校依存的」「義務的」の4つの学習観を見出し、学校移行期に「意味理解志向」の低下と「暗記再生志向」の上昇がみられるとする⁹。

一方で、これまでの学習観研究について概観した伊藤・廣瀬(2015)の論稿は、学習観尺度の不十分さに言及している¹⁰。その論稿では、学習観を「学習の信念」と「学習を支える信念」に分類し、「学習の信念」において扱われているのは、知識の「理解」や「取り出し」の側面であり、「今後の教育動向として、汎用的な能力はさらに重要になっていくと考えられ、『分析』や『活用』についての側面を含んだ尺度を構成する必要がある」と指摘している。

このように、学習観の尺度については研究の蓄積があるが、コンテンツ・ベースの前提に立っている。藤村(2008)は、手続きの知識重視の「暗記・再生」型の学習観とそれに対立するものとしての概念理解的知識重視の「理解・思考」型の学習観を想定し、課題を用いた集団討論による中学校数学の実践研究を紹介し、学習観の変容を質問紙で測定して、「理解・思考」型の学習観に対応する項目が重視される傾向があるとしている¹¹。この他に、協働学習やコンピテンシー・ベースの学習観を中心に扱うものはほとんどみられない。

また、学習観に関連して「学習方略」がある。辰野(1997)は、学習方略を「学習の効果を高めることをめざして意図的に行う心的操作、あるいは、活動」と定義し¹²、瀬尾・植坂・市川(2008)は学習方略を「認知的方略」「メタ認知的方略」「外的リソース」の3つに整理している¹³。社会科教育において学習方略に注目したものとしては、進藤(2002)のメタ認知的学習方略と歴史学習の有意義化の関係を分析した論稿、吉田(2012)の評価方法と学習観・学習方略を分析した論稿、吉田・須郷・中山・渡部(2015)の学習意識や学習方略が学習者の歴史の成績にもたらす影響を分析した論稿、菊池・山口・石川(2018)

の協同学習と学習方略による思考力・判断力・表現力の育成についての論稿がある¹⁴。

しかし、学習方略は「学習」を効果的にする方法であり、コンテンツ・ベースの「学習」に視点が制約される懸念がある。そこで、本研究は「学習観」に焦点化し、心理学の尺度は利用せず、生徒の自由記述にて検討することとする。生徒は自らの受けた授業により、学習の認識を形成すると考えられるが、既存の学習観の質問項目による調査では、使用した尺度を超える生徒の学びの認識を把握できないためである。また、生徒への質問は、簡明さを重視して、「学ぶ、学習する」とは何をすることだと思いますか、とした。これにより、主体的・対話的で深い学びにおける学習観の一端を明らかにできると考える。

(2) 社会科における「学習観」について

授業において形成され、変化するものとして社会科の「学習観」を扱っている研究は、少ない¹⁵。学習評価と学習観の関わりについて中学校社会科の授業実践から研究した吉田(2012)は、「パフォーマンス評価を通して『量より方法』重視の学習観に変化」したとしている。また、中学校社会科の授業実践者と調査分析者の立場で「社会科学学習観」に焦点を当てた南浦・柴田(2013)は、生徒が身につけた社会科学学習観と教師の指導の関係、学習観形成を促すための観点について研究している。この論稿では、生徒の学習観の全体的変化は「自己の意見の構築」という観点の上昇と他の観点の漸減という結果となった。さらに、生徒へのインタビューから学習観に影響した要因として「日常的継続的な学習活動」「社会科学学習の意味についての言葉かけ」「学校環境の変化」の3点を挙げ、授業実践者へのインタビューから社会科実践への示唆として「単元レベルだけでなく日常的な学習活動やことばのレベルで社会科学学習の目標を入れ込んでいくこと」「教師自身の社会科目標観を確立し、カリキュラムレベルも含め柔軟に展開していくこと」「支持される学習観を学校と教科で関連付け、推進していく主体となること」の3点を考察している。

これらの先行研究は、学習観の変容を心理学の尺度や独自の選択肢を用いて検討しており、自由記述から読み取ろうとするものではない。そのため、特定の学習活動に注目し、仮説生成的に生徒の学習観とその変化を扱う本研究は、新たな知見を提供し得ると考える。

3. 研究の方法

本研究では以下の方法により分析し、学習観の変化と形成の要因について検討する。

(1) 質問紙の質的・量的分析

授業前(4月、初回)と授業後(1月、最終回)に「『学ぶ、学習する』とは何をすることか」と問い、自由に記述させる。授業後の調査ではこの質問に加え、「現代社会の授業で『学ぶことができた』と思うもの」について選択肢を用意し、複数選択で回答させる。また、「現代社会の授業で学んだと思うことはずばり何ですか?」(学びの実感)、「現代社会の授業で『ここだけは良かった』というところを教えてください」(肯定的評価)と問い、記述させる。なお、無記名式の調査であり、個人内の変容は分析できない。

これらのデータから、自由記述の分類により生徒の学習観の全体的変化を探り、複数選択式の回答傾向、及び質問への記述内容から授業において学びを実感したこと、肯定的に評価する学習活動を読み取り、学習観との関係と学習観の形成要因を分析する。

(2) 参与観察者へのインタビューの分析

授業者（筆者）の授業を定期的に参与観察している教職大学院研修生に対して、半構造化面接法でインタビューする。質問内容は、「授業の感想」「授業の特徴」「生徒に伝えようとしていること」「授業中の関わり」についてである。研修生は、教職大学院のカリキュラムに1年次の半年と2年次の1年間、週2回ほどの学校現場での実習が位置付けられている（東京学芸大学の場合）。授業実践時に筆者のもとで、授業の参与観察や学級・分掌業務、研究授業などの実習を研修生が行っていた。授業者の授業と生徒の実態を把握しているため、どのような授業をしていたか調査するのに、これ以上ない立場である。

このインタビューにより、参与観察者の視点から授業者と生徒との関わりや授業の状況を確認し、学習観形成の要因となり得る観点を分析する。また、授業者の教育観、授業実践の内容、生徒の反応から得られた知見を補い、分析の妥当性を高める一助とする。

4. 授業概要

(1) 実践した高校・クラス

実践を行った高等学校は、全日制普通科の公立学校であるが、小中学校において様々な事情により学習に十分に組み込まなかった経験をもつ生徒が大半を占め、進学よりも就職の多い進路多様校である。今回の分析の対象となる生徒は、3学年の必修「現代社会」の2クラスで在籍数の合計は67となる。ただし、生徒の欠席、未記入、記述の不足により分析可能なデータが非常に限られていた（授業前調査55人、授業後調査は48人）。

(2) 授業の目標（教育観）と年間計画

カリキュラムレベルの目標は、主権者としてよりよい社会の構築にむけて課題を解決するための基礎となる資質・能力を「①討論・発表・論述などの学習活動を授業の中心にする」「②現実の課題に関するニュースを生徒に説明・発表させる」「③社会へ開かれた関心につながるような外部連携を推進する」ことで育成することである。

学習活動においては、生徒に多様な学習の機会を与え、生徒の考えを引き出し、「自らの考えを深める学び」や「他者とともに判断する学び」に誘うことを目標とした。

学期	月	内容	学習活動の例
1	4	新聞の読み方 地球環境問題	記事要約の1分間スピーチ【発表】、温暖化対策の紙上対話【討論・論述】、人生で大切なことランキング【討論】、若者世代を名付ける【討論・発表】
	5	青年期	
	6	雇用・労働問題	労働問題ケーススタディ【討論・発表】、株式学習ゲーム【討論】、新聞活用の選挙学習【ジグソー法】
	7	株式	
2	9	企業活動 租税・財政	株式会社をつくろう【討論・発表】、株式学習ゲーム【討論】、国のあり方選択ゲーム【討論】
	10	民主政治 個人の尊厳	コンセンサスゲーム【討論】、法案を考える【討論・発表】、民主主義の限界【論述】、ハイジャック機撃墜法案【討論】、人権ランキング【討論】
	11	金融・契約 司法参加	借金返済ケーススタディ【討論・発表】(外部連携) 評議ディスカッション(昔話法廷)【討論】
3	1	国際社会	人道的介入【討論】、平和についての意見文【論述】

評価は毎授業の振り返り記述、確認テスト(年4回)では知識問題と事前予告の論述問題
教職大学院研修生にも実習の一環として部分的に授業を行ってもらっている

(3) 授業の構造と工夫（「人間らしく生きる」の単元指導計画を例に）

授業実践した「人間らしく生きる」の単元指導計画をもとに説明する。授業の構造について2つの大きな特徴がある。1つ目は講義以外の学習活動が入っていること、2つ目は振り返りの学習活動が入っていること、である。これらを通して、個人の尊厳や人権という

抽象的な概念を自らの気づきや他者との対話の中からつかみ取らせる。さらに、憲法の基本的人権と関連させ、自分なりの意見として記述させることを重視して実践している。

さらに、生徒のアウトプットを引き出すための工夫（アクティブ・ラーニングの視点）として、①「書く、話す、発表する」という生徒が自分の考えを表現する機会を積極的に設け、②テーマ

	テーマ	学習内容・学習活動
第1時	人間の尊厳について“ハイジャック機撃墜法”から考える	導入：グループ対戦型クイズゲーム（復習） 展開：ハイジャック機撃墜法案・選択ディスカッション（賛成・反対をグループ討論） まとめ：振り返り（記述）
第2時	“人権”、“人間らしく生きる”とは何か、自分で定義する	導入：「人権の物語」（映像） 展開：人権に優劣はあるか（順位付けをグループ討論） まとめ：振り返り（記述）
第3時	「人間はなぜ憲法を定めるのか」を人権と憲法の関係から考察する	導入：1人を犠牲に2人を助けるか（臓器移植の思考実験） 展開：日本国憲法における基本的人権の保障（講義） まとめ：振り返り（記述）

備考：毎授業の冒頭で生徒1名が新聞記事の要約・感想を発表している（1分間スピーチ）

や問いかけを厳選し、指示を明確化して、円滑に能動的な学習活動に移行できるようにし、③授業の冒頭に「1分間スピーチ¹⁶」（ニュースの発表）を1人ずつ継続的に行い、④「振り返り」を記述させ、学んだことを自分の考えや意見として深めさせた。ちなみに、「人権」とは何だろうか？「人間らしく生きる」とはどういうことだろうか？という本質的な問いに対する生徒の振り返りとして、表1の記述があった。このように、社会契約の前提となる考え方や自らの疑問

表1 生徒の「問い」に対する振り返り記述

「自分が生きていく中で自由に生きていたら人を殺したりすることやものを人から取ったりして動物みたいになっちゃうから智えをもった人間が考えた生きていくためのルール」
「まえから罪を犯した人はそく死とかじゃなくてろうで生活するだけでちゃんどごはんも食べられるし、ぬるいと思っていたけど人権があるからそうゆうことがないんだとわかりました。」
「おれがおれであることをおれがいいの人にみとめさせるためだとおもう。A or B or Cなどのせんたくしを自分でつくってえらんで生きること。」

アクティブ・ラーニングとしては、論点を整理して、AかBか選択肢を示し、その意思決定をグループで討論させる形式を多く取り入れた。生徒は話し合い、班の選択とその理由を全体に発表する。その際、グループの意見をまとめ、生徒がシートにそって書いていくと、発表用の台本にもなる「グループワークシート」、司会者が読むことで班の全員が意見を述べ、補足意見を踏まえてまとめるという流れをつくる「話し合いがうまくいくディスカッションカード」を作成し利用している。

また、生徒の認知的特性や個人差に対する手立て（ユニバーサルデザインの視点¹⁷）として、①授業の流れを示して、時間の見通しを持たせ、活動ではタイマーを表示し（時間の構造化）、グループの討論では他者の意見を聞き、議論することで自らの考えをま

ハイジャック機撃墜法案・選択ディスカッション

あなたは、国会議員です。次の法案に賛成票を入れますか、反対票を入れますか？

「乗っ取られた飛行機が降参ビルに突っ込み、多くの犠牲者が出たアメリカ同時多発テロなどを想定し、被害を最小限にとどめることを狙い、乗っ取られた飛行機の墜落を認めると決まり、3000人が仕事しているビルに300人の乗客の乗っている飛行機が衝突して、3300人の命を失う可能性があるので、300人の乗客の犠牲はやむをえないと考えるか。」

グループ は、賛成 反対 の票を入れます。
(どちらかにO) を選択しました。

その理由は、・・・

.....

.....

.....

.....

司会者 氏名 _____

2年 ____ 組 教員 氏名 _____

話し合いがうまくいくディスカッションカード

1、各自がこのカードにそって、話し合いを進めることを確認する。

2、以下のセリフを読む

司会「それでは、今回は、ハイジャック機撃墜法案に賛成するの反対について話し合います。まず、O○さんから順番に、自分の選択とその理由についてメンバーに話してください」

メンバーの全員が自分の選択とその理由を話す。

司会「今のところ、賛成○人、反対○人となっています。意見のある人は、さらに理由を伝えてください。」

意見がある人が、さらに理由を説明する。

司会「あと3分ほどで、意見をまとめる必要があります。理由をはっきりとさせ、整理して、発表できるようにしましょう。」

発表できるようにまとめる。

※「今のままと変わらない・・・」というグループの司会へ

賛成と反対の意見の両方を発表するという方法もOK!

YES NO

とめられるようにするとともに（共有化）、議論が進まない場合は、進め方についてのプリントを利用できるようにし（参加の促進）、③ICTや視聴覚教材の利用（視覚化）を行っている。

その他、授業では生徒を授業に参加させるための教材・教具の工夫として、いくつかのツールを作成し活用している。「1分間スピーチ」や「論述課題」では、ループリックを作成し、学習の質を高め、生徒一人ひとりの学びを保障することを目指している。

5. 学習観の形成と変化の検討

(1) 学習観の分類、変化の分析

学習観に関する生徒の自由記述から授業前の学習観を分類した（表2）。その分類に基づき、1年間の授業後の学習観を分類し比較することでその変化を検討する。

まず、授業前の学習観を3つに分類した。①「知識」型学習観は、講義内容の理解や知識を増やすことを学習だと認識する学習観である。学習とは、知識を覚え、身につけることである。②「自分・社会志向」型学習観は、自分が社会に出るときのために知識を得ることを学習だと認識する学習観である。学習とは、自分や社会を知り、役立たせることである。③「資質・能力」型の学習観は、主体的な思考や他者との交流を通じて深く考えることを学習だと認識する学習観である。学習とは、自分で考えたり、調べたり、他者に意見を聞いたり、教えたりすることである。④同語反復的記述・不明は、①～③以外の回答であり、学習とは学習すること、勉強、わからないとする学習観が十分に記述されていない状態である。

学習観の分類に用いた「知識」と「資質・能力」の違いについて、国立教育政策研究所（2016）は「知識は学んで身に付けるもの、資質・能力は自分の中にあるものを引き出して使うもの」としている¹⁸。知識と資質・能力は学習を進めていく中で一体化されるものであるが、分類の上では「知識」

表2 生徒の学習観(授業前)

<p>①「知識」型の学習観 (20)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ノートに書く、先生の話を書く=テストの点を取る→学習できたということだと思います ・先生が話していたことや黒板に書いていたことを、自分なりにキレイにまとめて、しっかりと理解すること ・知恵にする・知識を増やしていくこと・ちゃんと授業に出て教わったところを理解すること ・はなしをきく・覚えて身につける・集中して授業に取り組む・ちゃんと理解すること・物事を知る ・今、以外のことを自分にとり入れることでもっと理解ができたりすることだと思う ・くり返しやること・歴史を学ぶ・知識を増やす(2)・自分の知識にプラスする・知らないことを知る(2) ・今まで知らなかったことを理解して、記憶しようとする・いろいろなことを知ることだと思う
<p>②「自分・社会志向」型学習観 (20)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知識をつけて自分のために役立たせる・新しい知識を得てそれを社会に生かすこと ・社会のことについて知る・社会に出てはまずかしくならないため・自分の知識や世界観を広げること ・頭に入れて、覚え、それを生活や学校で発揮するもの・社会にでて困らないようにするために学ぶ ・社会勉強・社会のためにいろいろ学ぶ・社会にでる上でやらないといけないこと・社会への一歩 ・社会に出るための第一歩・将来のため・社会に出て恥をかかないために学ぶことだと思います ・社会に出たとき困らないように今起きている事や昔のことを学ぶ・自分の将来のため ・恥をかかないために知識を身につける・心の世界を広くする・大人の世界を学ぶ・有利になる
<p>③「資質・能力」型の学習観 (8)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分で調べ、考えながらやること・ちゃんと考えること・考えること、人の意見を聞くこと ・自ら何かを学ぶこと・現状を知り、それに対して深く考える、調べる・友達に教えることができること ・いろんなものを使って調べる・さまざまなこと知り、みんなではなく、私たちが変えること
<p>④同語反復的記述・不明 (7)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習するということ・わからない(2)・まだわからない・勉強する(2)・勉強

は内容知、「資質・能力」は内容についての学ぶ力や考える力（方法知）を重視する学習観と整理した。また、「自分・社会志向」型の学習観がみられたのは、卒業後の進路として就職者が多いという学校の特性に起因している可能性が考えられる。

次に、年間を通じた授業後の自由記述を学習観の3つの分類で整理した。表3はその代表的な記述をまとめたものである。さらに、授業前の分類結果と割合を比較すると、次の

2点が明らかになった（表4）。

1つ目は、「知識」型学習観の生徒の大幅な減少と「自分・社会志向」型学習観の生徒の減少、及び「資質・能力」型学習観の生徒の倍増である。2つ目は、「資質・能力」型学習観の記述内容の質的变化である。授業前の調査と比較すると、授業後の調査では、自分の考えをもち、他者と共有して深めることが強調された記述がみられるようになっている。

このような学習観の全体的な変化や質的変容は、何によってもたらされたのか。他の調査項目から検討する。

表3 生徒の学習観の例(授業後)

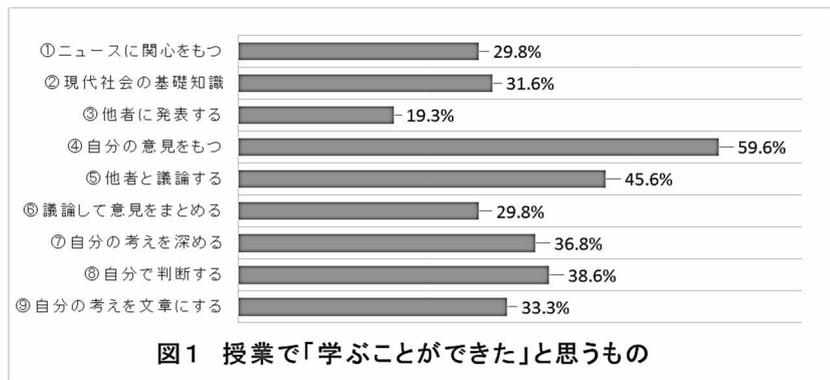
①「知識」型の学習観 (11)
例 ・きちんと理解すること・知識を得ること・知識を増やす ・教えてもらったことを理解して覚える。 ・自分が先生のお話を聞いて理解する事だと思います。
②「自分・社会志向」型学習観 (14)
例 ・自分の人生のため・世の中についていくため ・自分の力にする・これから生きていく上で活用していく。
③「資質・能力」型の学習観 (14)
例 ・聴いて考えて共有してその考えをより深めること ・自分の考えをもつこと ・1つでもいいから自分の考えをもち、それらを発表し合うことで得る新たな考え方や知識を持つこと ・ただ話を聞いて書くだけでなく、自分の考えを持ち、生かすこと
④同語反復的記述・不明 (9)
例 ・学んで学習すること・勉強・わからない

	授業前	授業後
①「知識」型の学習観	36.3%	> 22.9%
②「自分・社会志向」型学習観	36.3%	> 29.1%
③「資質・能力」型の学習観	14.5%	< 29.1%

「<」は増、「>」は減を示す

(2) 学習観の形成要因① (選択式質問の回答から)

学習観の形成に関する前提として、授業で「学ぶことができた」と思うものという複数選択式の質問の回答傾向を確認する（図1）。生徒のうち約60%が自分の意見をもつこと、約46%が他者と議論することを学んだと回答している。さらに、約39%が自分で判断すること、約37%が自分の考えを深めることを学んだと回答している。他にも、生徒のうち約33%が自分の考えを文章にすることを学んだと回答している。この結果から、自分の考えをもち、他者とグループで判断し振り返るという資質・能力の成長を生徒の多くが実感していることが確認される。



自由記述により析出された学習観が、授業に取り入れた学習活動を反映していると考えれば、自分の意見をもつという「主体性」、他者と話し合うという「対話的な関わり」、それにより考えを深めるという「深い学び」の学習の経験が「資質・能力」型学習観の形成に関わりがあると考えられる。

(3) 学習観の形成要因② (「学びの実感」と「肯定的評価」の記述から)

学習観の形成に関する検証として、「現代社会で学んだこと」「授業の良かった点」の自由記述の内容と分類した学習観の関係を検討する。表5は、1年間の授業後に生徒が記述した内容と学習観の分類を整理したものである。

まずは、約56%の生徒が「現代社会で学んだこと」「授業の良かった点」「学習観」のいずれか1つ以上にグループワークや論述に関わる内容を記述しており、授業において学習

活動の印象が残っていることがうかがえる。次に、「資質・能力」型学習観（分類③）に限って、「現代社会で学んだこと」「授業の良かった点」の両方あるいは片方にグループワークや論述に関わる内容を記述している生徒の割合を調べると、約64%であった。例えば、「資質・能力」型学習観の生徒の記述（表5、No.3）を取り上げると、現代社会で学んだことには「自分の意見をしっかり持ち、それらを他の人と共有し合いより良い考え、意見を持つことの大切さと協調性をこの現代社会で学びました」という資質・能力を引き出す「学びの実感」、授業の良かった点には「グループワークや発表することの大切さ大事さを強く感じることができた！」という学習活動の「肯定的評価」を記述している。一方で、「知識」型学習観（分類①）と「自分・社会志向」型学習観（分類②）の学習観で同様の分析を行なうと、それぞれ45%と14%となった。つまり、「資質・能力」型学習観と比較してアク

表5 生徒の記述一覧(授業後)

No	現代社会で学んだこと	現代社会の授業の良かった点	学ぶ、学習するとは	学習観	
1	これから生きていくために、必要な知識、自分の意見をもつこと。	発言もあってグループワークもあるからバランスの良い授業	自分の考えをもつこと	③	
2	グループワークの仕方を学び、社会についても学べたと思います	議論して意見をまとめることは良かったと思います。自分の意見とは違ったもの(考え)を聞けたので良かったです。	書いて、話して、聞くこと		
3	自分の意見をしっかり持ち、それらを他の人と共有し合いより良い考え、意見を持つことの大切さと協調性をこの現代社会で学びました。	グループワークや発表することの大切さ大事さを強く感じることができた！	1つでもいいから自分の考えをもち、それらを発表し合うことで得る新たな考え方や知識を持つこと。		
4	自分の意見や考えを尊重すること！	グループワーク。文章を作る。	ただ話を聞いて書くだけでなく、自分の考えを持ち、生かすこと		
5	思っている考えを文にして書くこと	話し合いの時間が多い、プリントの最後のまとめ	裁判の話し合いをしてみると自分の意見と逆な意見を聞けるから考えさせられた。		
6	世界のこと、日本のこと	グループワーク	自分でかんがえる。ともだちとはなす(いけんこうかん)		
7	生き方	グループワーク	聴いて考えて共有してその考えをより深めること		
8	考え方や今の生活で起きていること	自分の考えをまとめ、発表、というところが良かった	一つの事をそこまで理解し、他人に説明できるくらいに		
9	考える力と判断力		自分で考え、調べること		
10	世の中の現実です。	プリントに写すとき、プリントの内容が分かりやすかったところです。	考えたり、クラスのメンバーと考えて話し合ったりすることです。		
11	社会の難しさややこしさ、ふくざつなど		グループで話題に対しての答えを出す		
12	沢山です。1つにするのはムズかしいです。		自分の意見も考え、また友達にも聞いてもらう		
13	今の現状	プリントで授業すること	書いて、聞いて、話す		
14	特になし		人の話をよくきき、自論をしっかりと持つこと		
15	多様多様。考え方は一つじゃないこと。	内容がわかりやすい。スクリーンのやつもみやすい。	知識を得ること		①
16	現代に関するすべて	班活動など、話し合いの時間が多いこと	知るために必要なこと		
17	今の世界の事や社会の常識	グループ授業。より理解を深めることができた。	きちんと理解すること		
18	人間の高度な文明	グループ活動が多く他人の意見がよくきけた。	頭に入れる		
19	現代の社会のこと	プリントの最後に論述があるから、振り返ってみたときに、ここはこんな内容だったなと思い出すことができる。	新しい知識を頭の中に入れること		
20	社会に出た時のマナー、知識など	色々な知識を学べる	知識を得ること		
21	最近の日本を含めた世界でのことや社会に出てから必要になることを学んだと思います。		自分が先生のお話を聞いて理解する事だと思います。		
22	現代社会	全部良かった。現社の授業楽しくて好きだった。	勉強する、知識を増やす		
23	生きていくために必要なこと	そんなに悪いところがなかった。	知識を増やす		
24	社会の動き	こまかい部分までおしえてくれる	知らないことを知る		
25	日本の社会		教えてもらったことを理解して覚える。		
26	正しい考え、方法	全て	自分の人生のため		
27	最後の方の戦争について	グループワーク	世の中についていくため		
28	現代の社会について	先生の話がたのしかった	これからの私たちに必要な知識を知ること		
29		リアルタイムの情報が入っていき今何が起きているかが解るとこ	学生や社会人問わず、自分の中の可能性や行動のハバを増やすこと		
30	これから生きていく上で知らなきゃいけないことを学んだと思う		自分磨き	②	
31	自分が今後豊かな生活を送るちえ	映像をつかったの授業	他人にだまされないように。豊かな生活がおくれるように。		
32	社会の基礎知識		自分の力にする		
33	現代に日本でどのようなことが起きているのか。また、日本問題はなにかを知ること。	先生が色々わかりやすい様に、くふうして下さっているところ。今の日本がどのような状況なのかわかる。	自分にとって、プラスになること！！		
34	社会のルールや決まり		自分が将来使う時に大切などころ		
35	この世のすべて	たまに話がおもしろかった	自分、他人、いや世界を知る		
36	新聞などの大人になってから恥をかかないためのことを学んだ		これから生きていく上で活用していく。		
37	社会のルールと今まで	知らないことが学べる。先生のギャグがおもしろ	今の社会で生きていくこと		
38	全て	えいぞう付き	大人になって下のものに教える、じょうしきをする		
39	今と昔		人を育てる		
40	グループワークでの話し合いや、社会のことなど	現代社会の知識が少しはついたと思う。	学習すること		④
41	自分の考えを文章にわかりやすく書くこと		わかりません		
42	選挙について	自分の意見をもつことが大切だと知った	楽しく学べました		
43	現代の社会について	パソコンを使ったグループワーク	学び、学習すること		
44	現代社会で生きていくための知識	グループワーク	わからない		
45	自分が住んでいる国でも知らないことはたくさんある	はなしあい	べんきょう		
46	過去の歴史	映像を見て考えたこと	学んで学習すること		
47	いろいろなこと	全体的に良い	勉強すること		
48	人げんとか平等とかいろいろ	全体	ことばのとおり		

※アクティブ・ラーニングに関連している記述(話し合いや自分の意見を考える、グループワークなど)には、色をつけている。

ティブ・ラーニングの記述がなされていない。さらに、この2つの学習観では、学びの実感と肯定的評価の両方にアクティブ・ラーニングについての記述をした生徒はいない。

これらのことから、「資質・能力」型学習観の形成には、資質・能力を引き出す学びの実感とアクティブ・ラーニングへの肯定的な評価が影響していることが示唆される。

また、知識の理解を重視する生徒においてもアクティブ・ラーニングの学びへの一定の記述がみられるのは、学習内容の理解でもグループワークに有用性を感じ、「自分・社会志向」型学習観において顕著に少なかったのは、現代社会の知識を自分や社会に役立つことと限定する生徒の認識があるのかもしれない。

(3) 学習観の形成要因③ (参与観察者の視点から)

参与観察者へのインタビューについて質的に内容を分析して2つの観点を抽出した。先行研究の知見も踏まえ、生徒の記述との関連性から学習観の形成要因を探っていく。

ア 授業における二重の一致 (授業方法とねらい、授業者と学習者の認識)

インタビューでは、「活動の多さ」「問いやテーマで引きつける」「教えたこと確立」への印象や「ねらいをもって振り返りの記述」をさせ、「グループワークでの身につけさせたい技能を明確にした授業形式」という取り組みが語られている(表6)。このような授業方法とねらいの明確化と一致があったといえよう。さらに、授業後の記述でも、「自分の意見とは違ったもの(考え)を聞いた」や「グループ活動が多く他人の意見がよくきけた」ことが良かったとする生徒(表5のNo.2、18)や「話し合いが多い、プリントの最後のまとめ」を肯定的に評価し、「思っている考えを文にして書くこと」を学んだとする生徒もいる(表5のNo.5)。ここから、対話による気づきと振り返りで考えを深めさせようとする授業者の意図と生徒が受け取った学びの認識がある程度、一致していることが読み取れる。先行研究でも、教師の目標観の確立や継続的な学習活動の重要性とその一致について指摘されている¹⁹。生徒の学習を規定している要因は多いが、この授業方法とねらい、授業者と学習者の認識の二重の一致がみられることは、学習観の形成に影響していると考えられる。

表6 授業の感想、特徴、伝えようとしていること(インタビュー)

S: 授業を見て、思ったこと、思っていることは？
O: 思ったことは、僕にとっては衝撃的だったというのが、最初見た時の印象で、そもそもああいう形の活動を多く入れる授業っていうのを、やってみたかったけど、見たことなくてどうしたらいいかわかんなかったんですけど、そういった面ではすごく参考にできるなって思いましたし、あとは先生の考えさせる間いっていかテーマがすごい面白いもので、引きつけてるなっていう印象です。あれどうやって浮かぶのかなって僕も一緒に考えていて、あれが出来るのかって思っていましたね。…やっぱりそこを生徒に考えさせたいっていか、先生のたぶん教えたことが先生の中で確立してて、しっかり生徒に教えたんだなっていうのが、すごい伝わってくるって印象はありましたね。
S: 授業の特徴としてはどんなところにあると思いますか？
O: 特徴は、やり方としては活動なのかなというところなのかな。活動、そしてあと振り返り、その流れているのが、確立してて、その振り返りの中でもやっぱり、記述っていうところで、きっと何かねらいを、生徒のもっているものをうまく引き出すってところが印象なのかな。またそれ見て先生もしっかり、(授業を)変えていくっていか、自分自身も変える変えていくところは見習わないといけないっていか、そういうのも(学校で)広めていきたいなあって自分でも思っているところです。
S: 生徒に何を伝えようとしているか、あるいは何が伝わっていると思いますか？
O: ぱっとみて思いつくのは、社会をどうやって見ていか、見方・考え方ってところは、トータルして考えるとそこないう風に思っていて、あとは授業の形式としては、やっぱりそこ身につく技能っていうのは、しっかり、生徒たちの後の事も考えて、取り組んでいらっやっったのかな、と思います。
S: 技能っていか？
O: 発表であったり、何か話し合ったり、伝えること、それから聞くこと、というのは特にグループワークが多かったんで、そういったところも入るのかなってすごい感じます。

Sは杉浦(授業者・執筆)、Oは岡部先生(参与観察者)である

イ 授業文化の構築 (「言葉がけ」と「問い」による協働的な探究の場の創出)

インタビューでは、「聞く・話すの切り替え」「生徒の考えを引き出し尊重する」「生徒の声をひろいつなげる」という指導についての言及があり、「自由に発言できる雰囲気」と「予

定調和でない」展開となっていたという(表7)。生徒の記述にも、「自分の意見や考えを尊重すること」「多種多様。考え方は1つじゃないこと」を学んだとある(表5、No.4、15)。授業の文脈の中で発言を否定せず、正答ありきでない授業者の「言葉がけ」が重要な要素であったことを示唆している。

次に、繰り返し語られている授業の「問い」について考察する。石井(2015)は、汎用的スキルを直接的に指導するような学習が活動主義や形式主義に陥ることを危険視し、課題設定や場づくりによる「思考する文化」を教室に創ることを提唱している²⁰。インタビューでは、持続的な思考を促すような「問いの投げ方」がなされ、「身近で答えのない問い」という課題設定の効果が生徒の集中や記述量に

表7 授業での声かけや関わり、学習することについて(インタビュー)

S: 授業での声かけや関わりについてはどう?
O: そうですね。自分ができていないからかもしれませんが、聞く、話すの切り替えは参考になりました。だから、今、生徒が何をしたらいいのかわかるのかなど。勉強になりました。グループワークの中でまわっていると、生徒のもってる考え方を引き出そうとしている関わりだったり、そうですね、こちら側でまとめるのではなくて、生徒の考えを尊重してたなと思います。
S: 具体的には? こういう時にこう言っていたとか?
O: 自分では生徒の声を拾って最後までもっていかなくて、講義でもひるってつなげていくとか、そういう部分はあるなと思います。だからこそ、生徒も自由に発言できる雰囲気になっていたのだから、そういうふうになりました。発言を否定もしないので。そういう授業って少なくて、生徒に聞くだけというのはあつたんですけど。生徒だったら安心感あるかな。それをまた誰かがひろってつなげていくのは面白いです。予定調和じゃないっていうのは。考えた時にぼっと浮かぶ印象なんですけど。
S: 何か学習するということについては、何かしら伝えていると思いますか? 学習するということについて。
O: そうですね。(少し考える)自分で、習った後もしっかり学んでいかないといけないっていう投げ方もすごいされているなって思ったので。それが、この後に続いていく、きっかけになっていくんじゃないかなってすごく思います。やっぱりそこは、先生がたぶん教材研究をしっかり、そういう身近であつたり、それから答えのないものだったりというものを使ってるからこそなかなっていう風にごく思います。生徒もしっかり集中してたし、けっこう記述とかみても、量も多いですし、...

現れていたという。今回の授業実践は、「問い」の設定と「言葉がけ」、グループワークの学習活動により「協働的な探究」を促す授業文化を構築することに偶然にも成功し、学習観の形成を支えていたのではないかと考えられる。

また、授業者と参与観察者の会話は「今後の授業をどうするか」という話題に発展し、「自分の成長がわかるような機会をつくり、振り返ってつなげていく」、「将来の持続可能性などの視点の導入」、「自分の生き方に落として考える」「横の教科間のつながり」「本質的な学習内容のさらなる厳選」など、今後の実践への課題を挙げた。

6. おわりに

(1) アクティブ・ラーニングと学習観の形成について(研究の成果)

本研究の成果は、第一に、高校生の学習観を「知識」型学習観、「自分・社会志向」型学習観、「資質・能力」型学習観に分類したことである。第二に、年間を通じたアクティブ・ラーニングの授業実践による「資質・能力」型学習観の生徒の増加という全体的な変化と質的変容を分析したことである。第三に、「資質・能力」型学習観の形成において、授業の学習活動と関連した生徒の「資質・能力を引き出す学びの実感」と「アクティブ・ラーニングへの肯定的な評価」が影響していることを示唆したことである。第四に、参与観察者へのインタビューにより、学習観の形成要因として、授業方法とねらい、及び授業者と学習者の認識の「授業における二重の一致」を見出し、教員の問いと言葉がけが協働的な探究を促進する「授業文化の構築」となって学習観の形成を支えることを示唆した。

これらの考察から、授業文化や学習活動から絶えず学ばれる学習成果の1つとして学習観を捉え直すことができる。さらに、「学び直し」において、アクティブ・ラーニングを取

り入れることは、学びに困難を抱える生徒の非認知能力や自己肯定感の育成においても重要であるが²¹、知識を増やす学習観から「考え合う」学習観への転換を促し、主体的に思考し他者と協働的に探究するための資質・能力の育成につながったと考える。

(2) 今後のアクティブ・ラーニングと学習観の研究について (研究の課題)

研究の課題として、第一に、質問紙調査の質的・量的分析とインタビューによる質的・事例的な方法を用いているため、本研究の知見を一般化するにはさらなる検証を要する。第二に、公民科の授業における研究であっても、生徒の学習観は学校の教育活動全体を通じて育成されたものであり、想定していない要因や学習経験が背後にある可能性は排除できない。第三に、アクティブ・ラーニングの問題点として自発的に従わせるための学習活動になるとの懸念も指摘されており²²、今後は、生徒の思考活動への影響や「見方・考え方」の育成と評価のあり方を合わせて検討する必要がある。このような課題はあるが、アクティブ・ラーニングと資質・能力、学習観の形成は、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に欠かせない視点である。同時に、学習者による自分の学びについての記述をもとにして学習観を把握することは、協働学習を含むコンピテンシー・ベースの授業のあり方を考える手がかりとなる。具体的な事例を示して論じた本研究が、公民科・社会科にとどまらない授業の実践的追究につながれば幸いである。

最後に、本研究を実践するにあたっては、当時の勤務校の教職員の方々と生徒の協力を支えられ、深く感謝している。特に、授業の参与観察に基づくインタビューにご協力いただいた研修生の岡部裕太先生に感謝の意を示し、本稿を閉じたい。

【註】

- 1 本研究を実施したのは、「エンカレッジスクール」と呼ばれるタイプの都立高校である。東京都教育委員会「都立高校改革推進計画 新たな実施計画—日本の未来を担う人間の育成に向けて—」(2002)では、「小・中学校で十分能力を發揮できなかった生徒のやる気を育て、頑張りを励まし、応援する学校として、社会生活を送る上で必要な基礎的・基本的学力を身に付けることを目的として、既設校の中から指定。基礎・基本を徹底するとともに体験学習を重視」する高等学校と説明されている。エンカレッジスクールを研究したものに、宮越浩子「東京都のエンカレッジスクールにみる学び直しの実情と課題」(政策研究大学院大学 公共政策プログラム教育政策コース ポリシーペーパー、2017)があり、実践を行った高校も取り上げられている。
- 2 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』(東信堂、2014)
- 3 文部科学省「高等学校学習指導要領解説」(文部科学省、2018)
- 4 堀野緑・市川伸一・奈須正裕「基本的学習観の測定の試み—失敗に対する柔軟的態度と思考過程の重視」『教育情報研究』(6、1990)
- 5 市川伸一「学習動機の構造と学習観の関連」『第37回日本教育心理学会論文集』(1995)
- 6 高山草二「大学生の学習観の特徴と構造」『島根大学教育学部紀要 人文・社会科学』(34、2000)
- 7 植木理恵「高校生の学習観の構造」『教育心理学研究』(50、2002)
- 8 植阪友理・瀬尾美紀子・市川伸一「認知主義的・非認知主義的学習観尺度の作成」『日本心理学会大会発表論文集』(70、2006)

- 9 鈴木豪「小・中学生の学習観とその学年間の差異—学校移行期の変化および学習方略の関連—」『教育心理学研究』(61、2013)
- 10 伊藤慎吾・廣瀬英子「学習観研究の展望—「学習の信念」と「学習を支える信念」による分類—」『上智大学心理学年報』(39、2015)
- 11 藤村宣之「知識の利用・獲得とメタ認知」三宮真智子編著『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』(北大路書房、2008)
- 12 辰野千寿『学習方略の心理学—賢い学習者の育て方—』(図書文化社、1997)
- 13 瀬尾美紀子・植坂友理・市川伸一「学習方略とメタ認知」三宮真智子編著(2008)前掲書では、「リハーサル方略」「精緻化方略」「体制化方略」「理解モニタリング方略」「情緒・動機づけ方略」と自己調整学習の方略を含めて整理している。
- 14 進藤聡彦「メタ認知的な学習方略が知識の有意味化に及ぼす影響 歴史学習への好奇動機を喚起するための条件」『教育方法学研究』(28、2003)、吉田英文「パフォーマンス評価による教科学習観の変化—「覚える」社会科観から「説明する」社会科観へ—」『東京学芸大学教職大学院年報』(1、2012)、吉田英文・須郷一史・中山南斗・渡部竜也「学習者の学習意識や学習方略が歴史理解に与える影響について—高等学校日本史Aの学習を事例に一」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ』(66、2015)、菊地雄真・山口陽弘・石川克博「思考力・判断力・表現力を育む中学校社会科学習指導—協同学習と学習方略の活用を通して—」『群馬大学教育実践研究』(35、2018)
- 15 管見の限りでは、吉田(2012)前掲論稿、及び南浦涼介・柴田康弘「子どもたちの社会科学習観形成のために教師はなにができるか—ある中学校教師とその卒業生の事例からの探索的研究—」『社会科教育』(79、2013)である。
- 16 杉浦光紀(2017)「NIE 実践報告 2017～エンカレッジスクールでの実践 ゼロから始める新聞活用・新聞活用型主権者教育～」『平成29年度 研究報告書』(東京都NIE推進協議会編)では、1分間スピーチと新聞活用型ジグソー法の取り組みを紹介している。
- 17 ユニバーサルデザインの視点は、東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会・小貫悟『通常学級での特別支援教育のスタンダード』(東京書籍、2010)に詳しい。
- 18 国立教育政策研究所編『資質・能力 [理論編]』(東洋館出版社、2016)
- 19 南浦・柴田(2013)前掲論稿による。
- 20 石井英真『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影—』(日本標準、2015)
- 21 ポール・タフ著、高山真由美訳『私たちは子どもに何ができるのか 非認知能力を育み、格差に挑む』(2017、英治出版)は、自律性、有能感、関係性を経験させる協働の学びが、逆境に育った生徒の気持ちを学校に向け、非認知能力を伸ばす手立てであるとしている。
- 22 小針誠『アクティブラーニング 学校教育の理想と現実』(講談社、2018)では、日本の教育史を通観し、実践上の課題や学力格差の拡大、「強い個人」を前提とした他者からの「学びの強制」と個人の内面への過剰な介入という政治性などを危惧している。